



第28号
2023.3

青少年赤十字

賛助ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団 〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
 事務局 日本赤十字社広島県支部 TEL (082) 545-5011

青少年赤十字の活躍に寄せて 広島県教育委員会教育長

平川 理恵



日本赤十字社におかれましては、全国の赤十字病院を中心として、様々な疾病の治療や感染症の拡大防止のための活動等に取り組み、社会活動を支えていただいていることに、心から敬意と感謝の意を表します。

また、青少年赤十字は、令和4年（2022年）に創立100周年を迎え、今年101年目の新たな一歩を踏み出されました。長年にわたり、児童生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することを目的として様々な活動を展開されてきたことに、改めて敬意を表します。

さて、令和4年1月から令和5年3月までは、創設100周年を記念した特別事業「100万羽おびるプロジェクト」を実施し、100万羽のおびる制作と、それらを「ひとつの大きなレイ」に繋いだ長さのギネス世界記録に挑戦されました。世界中の子供たちが学校に通い、教育が受けられるようにという願いを込めて制作されたおりづるは、県内各地から届けられ、その長さは世界最長として見事ギネス世界記録に認定されました。参加者は、仲間と協力し合い、課題を解決し目標を達成することの大切さを学んだことでしょう。その後は、おりづるを解体してノートなどの文具に再生し、貧困問題を抱

える国の子供たちに届けられています。本事業においても、誰の心の中にも本来ある「やさしさ」や「思いやり」の心を引き出し、主体的に行動できる児童生徒の育成に多大なる御尽力をいただきました。県教育委員会におきましても、「広島で学んで良かったと思える 広島で学んでみたいと思われる 日本一の教育の実現」を目指し、学んだ知識を活用して、他の人と協働して課題を解決する力を育むことを重視した「主体的な学び」を促す教育活動の充実に取り組んでいます。

青少年赤十字加盟校の児童生徒は、日常的にボランティア活動や国際交流などに取り組み、その中で、課題に「気付き」、課題解決の道筋を主体的に「考え」、仲間と協力して一歩ずつ「実行する」ことを学んでおり、これは、広島県で推進している「主体的な学び」と軌を一にするものと考えます。

令和5年5月には、G7広島サミットが開催され、児童生徒にとっても、改めて国際理解や世界の平和について考える機会となります。このような様々な機会をとらえ、これからも、「気付き、考え、実行する」力を自分たちの生活の中でも生かしながら、周りの人たちと共に生きることが出来る青少年の育成に取り組んでいきたいと思えます。

最後になりますが、青少年赤十字の更なる発展と加盟校の広がりに向け、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。



青少年赤十字、次の100年に向けて

日本赤十字社広島県支部事務局長

坂井浩明



賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

昨年、2022年は、日本の青少年赤十字の活動が100周年を迎えた記念すべき年である一方で、世界的には多くの危機に直面した一年でした。トンガでは火山噴火・津波被害など、地殻変動による自然災害が発生し、甚大な被害をもたらしました。またロシアとウクライナの紛争が激化したことにより、多数の死傷者やかつてない数の人々が国内外への避難を余儀なくされました。このような世界における人道的危機に対して、日本赤十字社は人道・中立・公平という赤十字の基本原則のもと人道援助を必要としている人びとに支援を届け続けています。

また、青少年赤十字の活動が100周年を迎えたことに伴い、広島県支部においては、広島県内の次世代を担う子どもたちが、周りの人たちと共に、100周年特別事業「100万羽おりづるプロジェクト」を実施しました。本事業には広島県内312校（園）の園児・児童・生徒の他、広島県青少年赤十字賛助奉仕団の皆さまをはじめとした多くのボランティアの皆様にご参加いただきました。集まったおりづるは、ノートに再生し、本年2月にネパールの子ども達にお届けいたしました。皆様には心から御礼申し上げます。

世界的には多くの危機が重なり合っている状況ではございますが、そのような時こそ、日本での生活が当たり前でないことに気づき、青少年赤十字の活動を通して、人の苦しみや痛みを「気づき」、同じ人間としてどうすればよいかを「考え」、自分のできることを、勇気をもって行動する「実行の人」として、是非とも成長してほしいと願っています。

広島県支部としても、今回の100周年の活動スローガンである「つなぐ」「つづける」「つくる」を大切にしながら次の100年を目指し、賛助奉仕団の皆様と手を携えて、青少年の育成を全力で取り組んでまいります。今後とも、青少年赤十字活動のさらなる飛躍に向け、皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

広島県青少年赤十字賛助奉仕団委員長就任にあたって

委員長 山中章敬



広島県青少年赤十字賛助奉仕団の委員長に就任しました山中です。前任委員長である日高先生の後任として、委員長を務めさせていただくことになりました。前委員長の行動力には到底及びませんが、活動を引き継ぎ、更なる賛助奉仕団の発展を目指して努力していく所存です。

青少年赤十字活動は、児童・生徒が赤十字の理念のもとで、活動を展開し、学校や地域社会・世界に

貢献する素晴らしい取り組みです。三大実践目標である「健康安全」「奉仕」「国際理解・親善」のもと、「気づき、考え、実行する」という態度目標に基づいて活動し、赤十字の人道的価値観やスキル・知識を学び、児童・生徒自身が成長していきます。賛助奉仕団は、その活動や児童生徒の成長を支え、さらに青少年赤十字の発展に貢献します。

青少年赤十字は、創設してから100周年を迎えました。この間、多くの青少年が活動をしてきました。その理念は変わることなく、「命と健康」「人間尊重」を最も大切にし、活動を展開しています。ウクライナをはじめ人道危機、紛争、暴力、気候変動、パンデミック、憎悪、いじめなど、非常に多くの課題に直面している世界では、赤十字と青少年赤十字の活動はかつてないほど重要になっています。赤十字、青少年赤十字の取り組みが大いに期待される所です。賛助奉仕団も、赤十字、青少年赤十字の普及に力を入れ、地道に取り組むを続けるつもりです。

本県賛助奉仕団は、青少年赤十字のさらなる発展を目指し、主としてつぎのことに取り組んでいます。

- ① 青少年赤十字への加盟促進
- ② 青少年赤十字活動の支援
- ③ 防災教材の作成
- ④ 賛助奉仕団員の入団促進

最後に、広島県青年赤十字賛助奉仕団の新会長として、組織のさらなる成長と成功に向けて努力してまいります。関係者の皆様のご支援に感謝し、明るい未来に向けて共に取り組んでいくことを楽しみにしています。今後ともよろしく申し上げます。

令和4年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会（報告）



賛助奉仕団 幹事長
寺田宣文

日時 令和4年10月28日（金）・29日（土）
場所 日本赤十字社広島県支部・メルパルク・平和公園・国泰寺中学校他

当研修会はコロナ禍による開催自粛が続き、3年ぶりに中国・四国ブロックの各県代表者が広島のに集い、連絡協議会・研修会を開催することができました。志を同じくする人々と手を取りあい研鑽に努めることの大切さをあらためて確認できた会となりました。

第1日

○開会行事（挨拶）

- ① 広島県支部事務局長
- ② 広島県 青少年赤十字賛助奉仕団委員長



広島県委員長の挨拶

○実践発表

- ① 呉市赤十字奉仕団 委員長 佐藤光子
地域奉仕団が市内の高校に訪問してJRC加盟を促し、賛同を得て地域清掃（高校生150人参加）や歳末募金を合同で行っているなど、地域奉仕団とJRCとの連携について発表がありました。
- ② 広島県立安西高等学校 教諭 前平芳延

○班別協議

メインテーマ

『青少年赤十字創設100周年、新たな1000年に向けて』

サブテーマ

- ① 賛助奉仕団としての悩みや問題点
- ② 防災・自然災害に対する取り組み
- ③ 新型コロナウイルス問題への対応や取り組み（「班別協議のまとめ」の抄録を巻末に掲載します）



班別グループ討議

○日赤広島県支部原爆メモリアルパーク見学



メモリアルパークの説明の後参加者の記念撮影

夕食・意見交流会

紙芝居「広島カープ誕生ものがたり」

ひろしま紙芝居村 村長 阿部頼繁

第2日

○研修視察1

広島市内原爆記念碑等フィールドワーク
案内は広島県賛助奉仕団員（三浦・山中）

① 宿泊所（メルパルク）

② 原爆ドーム

③ 旧相生橋碑

旧日本赤十字社広島県支部跡



全員でちかいの唱和
この大会は70年以上継続しています



私たちが賛助奉仕団では、令和4・5年度の2年計画で、広島県の児童・生徒向け「防災教材」を作成する計画です。既に日本

広島県青少年赤十字「防災教材」作成プロジェクト
賛助奉仕団 顧問 **日高敬司**

- ・ 開催県
広島県 JRC 賛助奉仕団委員長 山中 章敬
- ・ 次回開催県
愛媛県 JRC 賛助奉仕団委員長 鎌田サチ子

- 研修視察 II
令和4年度青少年赤十字広島県大会
会場 広島市立国泰寺中学校
- ③ 動員学徒慰霊塔
 - ④ 道路元標・元安橋
 - ⑤ レストハウス・原爆の子像
 - ⑥ 平和の灯
 - 広島平和都市記念碑
 - (原爆死没者慰霊碑)
 - ⑦ マルセル・ジュノー碑
 - ⑧ 平和大橋・元安川
 - ⑨ 白神社・国泰寺愛宕池跡
 - ⑩ 県立第一中学 追憶碑



- 赤十字社からは「まもるいのちひろめるぼうさい」が発刊され日本全校に配布されているところで、しかし、広島県では土砂災害警戒地域が全国で最も多い県であり、現に何度も災害が発生し、直近でも多くの犠牲者が出ています。そこで、広島県の実況に適した教材を作成する必要があると考えました。作成に当たっては、広島県防災課・砂防課、県教育委員会、日赤広島県支部、学校等関係機関などの協力を得ながらすすめています。また、最終版ができあがるまでは、何度か学校において実践していた、だき改良を加えていきたいと考えていますので、先生方のご協力をお願いいたします。
- 1 目的
児童・生徒に広島県の災害知識を周知するとともに、災害に対し、自ら気づき・考え・行動する子どもを育成する。
 - 2 対象
小学校（低学年・高学年）用、中・高等学校用
 - 3 広島県の現状
広島県は日本で最も土砂災害警戒地域が多い県です。（①広島県 47,725箇所、②島根県 32,220箇所、③長崎県 32,176箇所）
平成30年7月豪雨時における土砂災害発生箇所数 1,243箇所、浸水被害発生数（床上浸水 3,146棟、床下浸水 5,835棟）
 - 4 教材の仕上がり
①DVD、②印刷物
 - 5 内容
① 広島県の災害の歴史について
② 直近の災害の状況について
③ 広島県の災害の特徴

- ④ 災害・避難のシミュレーション映像、リアル避難行動マニュアル等
- ⑤ 避難経路マップ作成マニュアル等

(広島県支部報告)

100万羽おりづるプロジェクト

日本赤十字社広島県支部 組織振興

青少年赤十字ボランティア係長

窪田 由



100万羽おりづるプロジェクト

このプロジェクトは、青少年赤十字創設100周年特別事業として、青少年赤十字の歴史を振り返り、次の100年に青少年赤十字の心を繋げていきたいという願いを込めて実施した事業です。

青少年赤十字の心に触れていただく機会として、未加盟校を含む県内すべての小・中・高等学校に参加を呼びかけました。

呼びかけや参加依頼を行った結果、県内312校(園)、約11万人の児童・生徒が集まりました。そのうち、未加盟校は127校にもなります。さらに、赤十字サポーターをはじめ39の企業・団体からの参加を含めると約12万人が参加しました。これは企画当初の想定を遙かに上回る反響であり、プロジェクトの目的に賛同していただいた企業・団体の力添えもあり、より一層意義の深まる企画になりました。

最終的には、応募総数が120万羽を超え、広島

県支部にとっても過去にない参加規模の事業になりまた



学校でのおりづる贈呈式の様子
贈呈式は県内各地で行われた

ギネス世界記録挑戦イベント

おりづるの制作は、主に参加した各学校内で行われました。このプロジェクトの参加者が個々に活動しているのではなく、ひとつの目的のために繋がっていることを体感する企画が必要だと考え、ギネス世界記録に挑戦することを企画しました。おりづるを繋ぐことを通じて、人と人、想いをつなぐ、大切な意味をもった挑戦です。

8月中に学校等で折り終えたおりづるを回収し、未連結のおりづるを100羽ごとにおりづるを約一カ月をかけて連結しました。

9月22日から24日の3日間、広島県立総合体育館武道場を挑戦会場として、いよいよギネス世界記録挑戦イベントの本番を迎えました。イベント会場でのひとつの輪に連結していく作業には延べ450名の

ボランティアの方々が参加しました。このボランティア活動にも200名を超える青少年赤十字メンバーが参加しました。
「みんなで力を合わせて世界記録をつくりたい(中学生)」
「たくさんの方が作ったおりづるだからしっかりと繋げたい(高校生)」と、テレビ取材にしっかりとしたコメントをしている生徒の姿を見たときは、とても感動するものがありました。



おりづる連結の様子
2日間22時間を要した

9月22日から二日間の連結作業を終え、会場一面に並べられた光景は圧巻ともいべきものでした。9月24日、ギネス公式認定員と証人として集まった約60名のボランティアによって、審査が行われました。審査は5時間、一羽一羽がきちんとギネス世界公式記録における規程の折り方がされているか、サイズはあっているか、また未連結の部分がないかな

どの審査をしていきます。審査が終わると、数取器を手に、一羽一羽、数のカウントが行われました。この時、何羽並べられているのかななどの情報は、我々には一切知らされません。

続いて、測量士による距離の測定です。ギネス世界記録の正式な記録は距離で示されます。測量士7名が測量器を用いて、センチメートル単位まで距離を計算していきます。会場内は、静まりかえり、ボランティアの方々を含め、参加者は皆、会場のスタンドから固唾をのんで見守っていました。



測量士による距離計測の様子

結果、ひとつに繋がれたおりづるは、15,579,7m (使用したおりづる約58万羽)によって「Largest origami Tei」最も大きなおりがみレイク」としてギネス世界記録に認定されました。

参加者には、「ひとりではできないことでも多くの人が力を合わせることで成せることがある」とい

うことを、この挑戦を通じて体感していただいたと思っております。

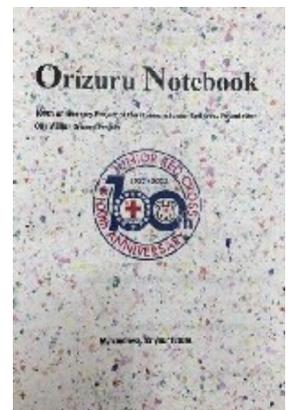


ギネス世界記録達成!! その瞬間に立ち会った児童・生徒たちの記念撮影

おりづるノート

9月26日からおりづるの解体が始まりました。ギネス世界記録に認定されたおりづるは、児童・生徒から寄せられたメッセージを印字した「おりづる再生ノート」として生まれ変わりました。

2023年2月6日に支部職員がネパール共和国に渡航し、ネパール子どもたちに手渡しで届けて参りました。



おりづる再生ノートの表紙
おりづるが綺麗な模様と
なって表紙を飾る

関西空港から2月6日朝10時に出発し、マレーシアを経由してネパールに到着したのは2月7日の午前0時を過ぎた頃でした。日本赤十字社本社の職員と赤十字・赤新月社連盟のスタッフと合流した後、ホテルにチェックインしました。翌朝、ネパール赤十字社本社を表敬訪問した後に、一路ポカラというネパール第二の都市を目指して自動車での移動を開始しました。

首都カトマンドウからポカラまでは、国内旅客機で25分、距離にして約200キロメートルほどですが、渡航直前に、同区間における飛行機事故が起きたこともあり、陸路での移動となりました。アスファルトの舗装された道路ではなく、ネパール特有の高低差の大きい山脈を抜けていく山道で、約10時間かけての移動となりました。

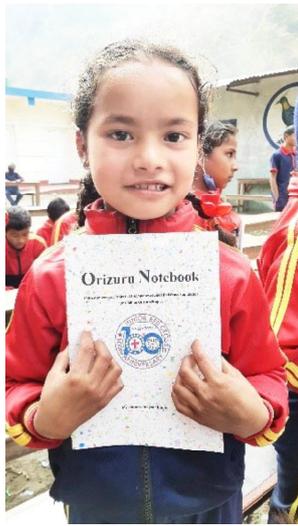
2月7日には、パルパト郡にあるシュリー・シヴァセカンドリースクールに訪問しました。小学校低学年から高校生までが在籍しており、日本でいう一貫校という形態の学校でした。

2月8日には、シャンジャ郡にある、シュリー・パブリックアカデミーセカンドリースクールに訪問しました。訪問した2校には近隣の学校からも子どもたちが参加して参りました。また、各郡や州を代

表する来賓も訪れ、学校の子どもたちから歓迎のダンスと歌を披露していただくなど大変な歓迎を受けました。



支部職員からおりづるノートを
受け取るネパールのこども
(パルパト郡)



おりづるノートの授与式が執り行われ、新型コロナウイルス感染症により家族等を亡くした子どもたちへ、職員からノートを手渡しました。その後、ノートを届けるまでの道のりについて話をしたり、おりがみ教室を行うなどの交流をさせてもらいました。訪問した学校の校長先生が、『このノートが子どもたちに与える可能性は無限大だ、とても感謝して

いる』と述べられました。このプロジェクトに参加したすべての人にこの言葉を伝えなければと、現地滞在中から、他の職員と一緒に動画制作を行いました。



おりづるノートを手に記念撮影
(シヤンジャ郡)

おりづるノートを受け取った子どもたちのインタビューでは、『このノートは私たちが前向きにさせるものだ』『広島の子どもたちについてかお礼がしたい』『私たちにもできることを考えて、困っている人を助けたいという気持ちになった』など、とても良いメッセージを寄せてくれました。

このネパール渡航の様子は、当支部の公式ホームページからご覧になれますので、是非ご覧いただければと思います。

これからも続ける

おりづる再生ノートの制作に関わる団体と連携して、おりづる再生ハガキの制作体験を支部事業の中

で展開しています。令和4年12月には青少年赤十字広島県高等学校協議会・総会において、高校生の要望に応じて、体験会を開催しました。

このプロジェクトに携わった高校生たちが、再生ハガキを作って平和ややさしさを伝える活動を始めています。



おりがみ教室で作ったハートのおりがみ
ネパールの子供が帰り際にプレゼントしてくれた。
『ギフトありがとう、日本の友人、兄弟、姉妹たち』

このプロジェクトは、これからの人道・平和教育へと繋げるとともに、参加した広島の子どもたちにとつて、今回得た体験と感じたことを未来の自分、そして未来の青少年赤十字メンバーに継いでほしいと願っています。

プロジェクトに快く参加いただいた学校関係者の皆様、多大なるご支援・ご協力いただいた関係者及びボランティアの皆様にご感謝を申し上げ、報告とさせていただきます。

(実践報告)

小学校リーダーシップ・トレーニン グセンター実施報告

小学校スタッフ 西廣直明

(安芸太田町立筒賀小学校教諭)



令和4年度の小学校トレセンは本来8月4日、日本赤十字広島県支部を会場として一日参加型での実施を予定していましたが、1日とはいえ3年ぶりの参加型。開催に向けて余念なく準備を進めていたところでした。しかしながら実施日が近づくにつれ、全国的に新型コロナウイルス陽性者数が激増し、参加可能な児童も半数以下となったため、8月4日の実施を見送り、11月後半の26日(土)まで延期することを決定しました。小学生はどうしても接近して活動することが多くなってしまうため、子供たちの安全を考慮した上での判断でした。

さて、改めて実施日が11月26日と決まったところで一つ問題点が浮上しました。夏の実施であれば日没が遅いため、17時までのプログラムを組んだとしても、遠方から参加する児童がトレセンを終えて帰宅した際、日が暮れて真っ暗になってしまうことはないと考えられたのですが、11月末は冬の始め。日没が早いので、遅くとも16時半には全プログラムを終了するように、当初の日程をさらにタイトにしなければなりません。本来であれば十分に時間をとって行いたいプログラムも短時間で設定せざるを得なくなりました。

そもそもトレセンは2泊3日の時間をとってプロ

グラムするものです。その中で子供たちには課題に対する「気づき」の時間、じっくり自分と向き合っ「考える」時間、勇気をもって「実行する」ための時間が確保でき、さらに指導スタッフもゆとりをもって子供たちの行動を見守り、「待つ」時間が確保できるので、今回のような短時間設定の中でどこまでねらいに迫れるのか全くの未知数でした。

しかし、これだけの短縮日程にも関わらず、今回熊野町、安芸太田町から13名の児童が参加してくれました。いずれも8月実施の際に申し込んでくれていた子供たちです。さらに、日時が変更されたことでスタッフの確保も難しいと思われましたが、今回5名の新採用の先生方が参加を申し出て下さいました。また、終日は難しいものの自分が担当する時間だけなら、と部分的に参加して下さいった先生方も含めて総勢11名のスタッフを確保することができました。

本年度のトレセンを通して、チーフスタッフとして私が得た気づきや学びは次の通りです。

①運営スタッフの機動力と質の良さ

11名のスタッフのうち、メインスタッフは4名でした。これに加えて担当の時間のみ参加するアシストスタッフが2名、合わせて6名で運営に当たりました。この6名のスタッフはそれぞれ得意分野や指導方法が異なりますが、その場で与えられた条件に即して子供たちの学びを創り上げるといふ点において共通点があります。実際の災害現場においても何もない所から暮らしを創り上げていくという赤十字の理念をベースに持ち味を發揮し、今回のトレセンでも活躍して下さいました。



ホームルームの様子

開始5分で子供たちの本質をつかみ、その質をどのように生かしてねらいに迫るか、どのスタッフもが自分の特性を生かし、考え抜いたプログラムを展開していました。また、その展開に応じて必要となるものに関しては支部スタッフが快く対応して下さいました。まさに、支部スタッフと運営スタッフの連携プレーにより、機動力、その場で創り上げるといふ力が發揮され、子供たちの学びを支えたのだと思います。

②「気づき」を促す効果的な仕掛け

本来小学校トレセンのスタッフは、期間中、会場

や子供たちの特性に応じて様々な「仕掛け」を巡らせ、子供たちを「待つ」ことを大切にします。しかし、今回は短縮日程のため、子供たちを待っている時間はありません。特にホームルームの運営では子供たちの自発的な発言を待てない状況でした。ホームルームティーチャーがメインで進めてもよいのかという葛藤もありましたが、今回の場合はホームルームティーチャーがファシリテーターの役割を務め、話題を提示して子供たちに発言を促したり、発言をつなげて新たな考えに結びつけたりすることが必要でした。

私が意識したのは子供たちに自分を語らせるということです。例えば、クラスで日頃やっていること、普段の生活で困っていること、自分の考えやアイデア、将来の夢などです。すると子供たちは別の学校の取り組みや他のメンバーの考えの良さに触れ、ここに「気づき」が生まれます。私は「いいな」「真似したい」と思ったことがあれば声に出して伝え合う場も設定しました。またどんな発言も否定しないことで「聞いてもらえる」という雰囲気づくりも大切にしました。効果的にファシリテートすることも気づきを促す大切な「仕掛け」だと感じています。

③若いスタッフの参加

本年度の全校種トレセンの中でも、5名もの新採用の先生方が参加した校種は他にないのではないのでしょうか。指導者協議会の中でもたびたび「若いスタッフが入ってこない」という話題が取り上げられ、どのように裾野を広げるかが大きな課題でした。今回5名の先生方にはグループサポートスタッフとして終日各ホームルームについて頂き、子供たちと一緒に活動してもらおう中で、赤十字の取り組みに触

れていたいただきました。特に指示のない中でスタッフとして動くことはとても難しかったのではないかと思いますが、若い先生方が少しでも我々の取り組みの価値に気づき、考え、ご自身の教育活動の中で実行に移していただけるなら、それはとても素晴らしいことです。



若い先生方の参加

赤十字の指導のノウハウは学習指導面においても生徒指導面においても汎用性が高いと考えています。自分たちの仕掛け方一つで子供たちが変わっていく。その過程を「楽しい」と感じていただけることこそが重要なのではないのでしょうか。赤十字の裾野を広げるという意味でも価値あるトレセンになったのではないかと考えています。

中学校リーダーシップ・トレーニグセンター実施報告

中学校スタッフ 荒木靖弘

(広島市立戸山中学校教諭)



はじめに

本年度、3年ぶりに中学校リーダーシップ・トレーニグセンターを開催した。過去2年間コロナウイルス感染症が蔓延し、感染防止のためやむなく開催を見送った。今年度は、幸いにも感染症対策を十分に行ったうえで、県内から18名の中学1・2年生が参加し、実施することができた。これまでリーダーシップ・トレーニグセンターは、3日間で宿泊を伴う日程だったが、コロナ禍での開催のため2日間の日帰りに短縮して広島県支部に集まるようにした。昨年度は、リモートで実施する校種もあったが、発達段階においてリモートによる開催よりも、中学生が実際に集まり多くの体験をすることが、赤十字の精神の獲得に有効であると考え、今年度も参集型での実施を考えた。

リーダーシップ・トレーニグセンターでは、青少年赤十字活動のリーダーにふさわしい人づくりを目指して、生徒に様々な課題を投げかけ、自己変革を促すために次の5つの活動運営を実践した。

1. 指示のない生活
2. 注意深い行動
3. 自分の考えを持ち、表現する行動
4. 自分にチャレンジする
5. 周囲のために自分を生かす行動

具体的な内容

1・掲示板の活用

支持のない生活・注意深い行動ができるように伝えたいことなどは、指導者も生徒も掲示板を通じて事前に知らせる方法をとった。

2・講義での意見交流と発表

各講義では、赤十字の基礎的な内容の理解を促すとともに、生徒どうしで考えを交流したり、まとめて発表したりする場面をつくった。特に

①防災

講義だけでなく、日本赤十字社広島県支部の資料庫や車両の見学をした。知識だけではなく本物に触れることができ、その後の生徒の活動や意見交流を活発にした。

②健康安全プログラム

心肺蘇生法やAEDの使い方について、一人一人の模型を使って実技指導をうけた。さらに翌日のフィールドワークの関所で、救助の方法を確認した。前日体験したことを生かすだけでなく、グループで協力し自信を持って実践できた。

③国際人道法

人間の尊厳について考え、人間らしく生きていくために大切なものについてグループ発表をした。また、国際人道法の成り立ちについて学ぶことができた。

3・フィールドワーク

グループでさまざまな課題に挑戦しながら、学習したことや体験した知識・技術を復習した。その中で、リーダーシップとフォローシップも体験することができた。

4・ワークショップ

活動で学んだり、各校の実践発表を参考にしたりして、学校に帰って実践する内容を指導者のアドバイスも含めて作成した。ニーズを考えることで、周囲のために自分を生かす行動にチャレンジするきっかけになった。

おわりに

今年度の参加者は、先輩からも体験を聞くことができている生徒たちばかりであった。はじめは、緊張した面持ちで参加していた生徒もだんだんと講義や活動の内容に引き込まれ、多くのことを吸収し、積極的に活動する姿が見られた。最後には、仲間との別れを惜しみ、とても充実した様子で会場を後にしていった。たった2日間の開催で内容を大きく削減・変更したが、それでも生徒の意識が変わり大きく成長する姿が見られた。また、後日生徒自身が作成したワークショップを学校で実践したことも聞いた。これからも、状況に応じたさまざまな工夫や仕掛けを入れたプログラムを用意し、生徒に多くの学習と体験ができるようにしていきたい。

高校リーダーシップ・トレーニングセンター実施報告

高校スタッフ 前平芳延
(広島県立安西高等学校)

新型コロナウイルスに揺れた3年間が、5月からの5類引き下げで次のステージに進もうとしている。広島県の青少年赤十字活動も大きな変化に巻き込まれた3年間だったが、特にこの令和4年度は、次へのステップにつながることを予感させる1年であった。

本誌で何度か報告させていただいたように、「2016ひろしま総文」を契機に、全国総文祭と県大会と併催する形をとるようになった県総文、そしてトレーニングセンターが広島県の高校協議会・青少年赤十字活動の3本柱となった。このトレセンも変遷を重ねながら、特にこの3年間は中止(令和2年度)、1日のみオンライン開催(令和3年度)を経て今年度は宿泊こそないものの久々の参集による研修が実施できた。



全員討議

3年ぶりに現地開催となった全国総文(とうきょう総文2022)を終えてすぐの8月8日・9日の2日間、広島県情報プラザを主会場に通いの形で開催することができた。9校26名(参加校は過去10年で最多タイ)の生徒が参加しました。戸惑いながら主体的な自己紹介が求められる開講式から始まり、初日は講義「赤十字の精神と青少年赤十字」や、実習を主体とした「赤十字救急法」を行った。オンラインでは出来なかつたホームルーム活動やVSにつながる係活動を対面で出来ることを生かして実施で

きた。また「ワークショップ事前学習」では、さまざまな活動の事例を紹介するとともに、東京での学びを生徒自身が全体に還元する場面も設けることができた。黙食などの制限があるものの、初日を終える頃には、生徒同士も打ち解けてきた。



フィールドワーク(暗黒の世界)

2日目は、高等学校では久々となる、関所型のフィールドワークを行った。限られた日程で行うため、赤十字の学びを体験的に協働的に学んでもらえるよう、県支部の施設も使いながら、生徒たちは楽しみながら、教員側も少しでも多くの学びを得てもらおうと工夫して行われた。最後のワークショップで各自が学校・地域に帰って行くことを考え、ホームルームで報告し合い、短いながらも充実した2日間を終えた。

今回、3年ぶりに行えたことで、生徒たちにとっても大きな経験となったが、スタッフの継承という視点でも大きな意味があったといえる。参加の9校

(宮島工業高校・舟入高校・熊野高校・安芸高校・安西高校・みらい創生高校・県立広島工業高校・呉工業高校・安芸府中高校)に加え、河内高校の先生もスタッフに加わっていただいた。



グループワーク

公立高校の先生方は異動が避けられないのが活動の継続において悩みの種である。しかし、近年は移動先の学校を加盟校にして再び参加されたり、異動を見据えて、若い先生方と一緒にトレセンに参加される先生が異動された後を、若い先生方が中心に引継ぎを行われるサイクルが生まれつつある。そういった意味でも、このトレセンは生徒にとつてだけでなく、指導者にとつてのトレセンでもあると強く感じた。

今後、宿泊等が可能になったあと、過去を取り戻すにとどまらず、さらに発展させていけるように生徒とともに工夫をしていきたい。

令和4年度広島県高等学校青少年赤十字県大会兼県総合文化祭JRC・ボランティア部門大会
JRC・ボランティア専門部事務局長
前平芳延(安西高校)

令和4年度は3年ぶりに参集して、10月29日、広島市立国泰寺中学校において、県総文部門大会を行うことが出来た。午前中の活動報告部門と、午後の分科会を使つての「救急法競技大会」は救急法部門の2本立てである。

平成28年度の「2016ひろしま総文」後、協賛部門として開催される年の選考大会として、県大会とあわせて県総文を開催するようになって6回目、2年間つづけた救急法部門との2本立ての大会は3年ぶり3回目の大会である。今後もこの形を継続しつつ、さらに高校JRC活動が活発になる仕掛けを作り出せたらと考えており、今後ますます賛助奉仕団の皆様と連携して行きたい。

【大会結果】

(総合) 最優秀校 舟入高校、優秀校 安西高校・熊野高校

(活動報告部門) 1位 舟入高校・安西高校(同率)

3位 熊野高校

(救急法部門) 最優秀 安芸府中高校B、優秀(傷病者への声掛け) 舟入高校A、優秀(チームワーク) 熊野高校Aチーム

(参加校) 舟入・熊野・安芸府中・安西・宮島工業・県立広島工業・河内 7校39名が参加

(1校は見学・運営協力のみ)



県大会(活動報告部門)発表

・受賞コメント

【総合 最優秀校】

○舟入高校 2年 川本心遥 (JRC部部长)

今回6人で県大会に参加し、活動報告部門で1位、総合部門では最優秀校を受賞できたことをとても誇りに思っています。普段の部活で救急法や、包帯法をみんなで練習していたので、本番でその成果を出すことができたのかなと思います。今回習得したことを県大会だけでなく、実際に必要になった時に活かせるよう、引き続き練習していきます。

【活動報告部門 1位】

○安西高校 3年 岡田滯華 (キャリアデザイン部長)

今回、安西高校キャリアデザイン部で今年行った、献血やおりづるなどの活動に積極的に取り組んだことや、平和台団地のお年寄りのために幼小中高生のみんで協力して絵手紙を作ったことを県総文で報告し、活動報告部門で1位になることができました。これから今回の活動などを参考に、もっと色々な活動に積極的に参加していきたいと思っています！

【救急法部門 最優秀】



県大会(救急法)競技

○安芸府中高校Bチーム 2年 三宅遥香 (JRC部)

この度は救急法競技大会最優秀賞を受賞することができ大変嬉しく思います。それぞれがやるべきこと・ポイントを押さえ、競技では緊急時のことを思い心肺蘇生に努めることが出来ました。また、先生やチームメイトに丁寧に指導していただいた結果、受賞することが出来ました。本当に良い経験をさせていただいたこと感謝しています。ありがとうございました。

☆(参考)

広島県総合文化祭JRC・ボランティア部門大会の歩み

「ひろしま総文2016」(平成28年度)の翌年、「みやぎ総文2017」に6校(福山明王台・安芸・廿日市西・宮島工業・広島翔洋 6校13名)が参加、次年度からは県総文等を中心に派遣校を決定することを決め、従来県大会の午後に行われていた分科会をベースに県総文を企画した。(平成26年度・平成27年度は展示のみで県総文扱いとし、平成28年度は県総文は行わなかった。)

第1回(平成29年10月28日)

会場：井口中学校

活動報告のみで初開催(県大会分科会と併催)

最優秀校 宮島工業高校、優秀校 舟入高校・福山明王台高校

8校34名が参加(1校は代読、1校は発表なし)

舟入・福山明王台・廿日市西・宮島工業・崇徳・安芸・熊野(代読)・総合技術(発表無し)

2018信州総文祭で宮島工業高校が広島県代表として、ステージ発表。(派遣は宮島工業・舟入・福山明王台・廿日市西・安芸 5校12名)

第2回(平成30年10月27日)

会場：国泰寺中学校

初の救急法競技会実施(県大会と併催)

総合部門 最優秀校 舟入高校、優秀校 宮島工業高校・崇徳高校

活動報告部門 1位 舟入高校 2位 崇徳高校

3位 福山明王台高校

救急法部門 1位 舟入Gチーム 2位 宮島工業Aチーム 3位 舟入高校Eチーム

8校50名が参加 舟入・安芸・廿日市西・宮島工業・崇徳・総合技術・福山明王台・河内（救急法のみ）

2019さが総文祭で舟入高校が広島県代表として、ステージ発表。（派遣は舟入・宮島工業・福山明王台・崇徳・廿日市西・安芸 6校17名）

第3回（令和元年10月26日）

会場：国泰寺中学校 令和初の開催・救急法競技会も定着

総合部門 最優秀校 広島市立舟入高校 優秀校 広島県立宮島工業高校・広島県立福山明王台高校 活動報告部門 1位 舟入高校 2位 福山明王台高校 3位 崇徳高校 救急法部門 1位 舟入チーム 2位 宮島工業のチーム 3位 安芸チーム

10校80名が参加 舟入・廿日市西・宮島工業・河内・安西・安芸・福山明王台・崇徳・総合技術・熊野（以上4校は活動報告のみ）

2020こうち総文に舟入高校・宮島工業高校・福山明王台高校を派遣（オンラインで活動報告）

第4回（令和2年11月14日）

会場：日本赤十字社広島県支部 コロナ禍で県大会中止・支部で単独開催（報告・学習中心）

金賞 舟入高校 宮島工業高校 福山明王台高校（こうち総文を報告した3校） 銀賞 安芸高校 河内高校 安西高校 廿日市西高校（他の参加校）

銅賞（個人賞） 舟入2名 宮島工業・安芸各1名（司会・レク係などで貢献）

7校15名が参加 舟入・安芸・安西・福山明王台・河内・廿日市西・宮島工業

★変則的な大会開催となったため、別方式で表彰（運営に頑張った生徒・学校を表彰） ↓紀の国わかやま総文はボランティア部門がなかったため派遣なし。

第5回（令和3年11月27日）

オンライン開催 オンラインでの県大会と併催（活動報告中心）

金賞 広島みらい創生高校、安芸高校、賀茂高校、県立広島工業高校、広島なぎさ高校 銀賞 舟入高校 宮島工業高校 銅賞（個人賞） 安芸高校1名 広島なぎさ2名、宮島工業1名、舟入4名

7校34名（中学生を含めた人数）が参加 舟入・みらい創生・安芸・賀茂・宮島工業・県立広島工業・広島なぎさ

（実践報告）

本園の赤十字活動について 社会福祉法人光成会 保育所まこと学園 園長 東岸和子



令和4年度の青少年赤十字広島県大会で青少年赤十字に加盟して20年になるというこゝとで表彰を受けました。保育

所まこと学園は、広島市の北西部の団地の中にあります。定員は110人、1学年1クラスの園です。

今日のはなぐみ

2022・12・12

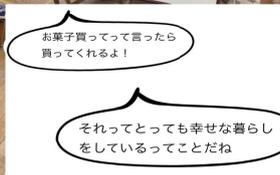
発表会ありがとうございました！！みんなかっこよかった☆ご褒美として、愛情たっぷりのぎゅーっをお願いしますね♥

今日は赤十字の口で1円玉募金について和子先生からお話をいただきました。募金箱は作っていたのですが、なんで募金をするのかということを書真を見ながらお話していただきました。写真をしながら子どもたちは見て感じたことを話してくれました。ただ、募金のためにお金を入れるのではなく、みんなが一個お菓子をかうのを我慢して募金することで救われる子どもたちがいるということを知りました。募金箱にお金を入れていただけると嬉しいです。本日持ち帰りますので、ぜひ子どもたちとお話してみてください。



病気になるったら、病院に行きたい！でもその病院へ行くこともできない人がいるということを知りました。

お腹が空いても食べ物が無い、お腹空いたまま寝ていく、そんな子どもたちがいることも知りました。



私共の法人は、安芸郡熊野町に3園の保育園があり、すべての園が青少年赤十字の加盟園です。私たちの園は、この法人内の保育園の活動をお手本にして活動してききました。

園だより（園長先生から赤十字の話を書きました）

アンリ・デュナンの誕生日5月8日近くの日程で、毎年「青少年赤十字加盟式」をします。私たちの園では3歳以上児（年少児）から加盟しています。加盟式では、創始者アンリ・デュナンの紙芝居（お手製のもの）を見たり、赤十字のことについて説明をします。私がお話をするときには、世界地図や地球儀を示しながら、また、外国の子どもの人形などを見せながら、「世界は広くいろいろな人たちが住んでいる」ということと「その人たちと仲良くしていかななくてはね。」ということを伝えます。

「世界」という言葉、概念は幼児にはイメージできにくいかもしれませんが、子ども達は真剣な表情で聞いています。その後、青少年赤十字のワッペンを年長児が新加盟の年少児につけてあげます。これには、少しストーリーがあります。年長児は数日前からワッペンをつける為に練習をします。あれにつ



人形で世界のごもたちを知る

いている安全ピンを操作するには経験がいります。指先に力もいります。針が刺さらないように洋服の生地をすくいあげることも経験がいります。指先のちよつとした訓練になります。園でも何度か練習した後、お家でも練習する子どももいるようです。針を小さいお友達にさしてしまわないようにと一生懸命な表情だったと聞きました。その練習の成果もあり、無事に新加盟の年少児の服には、先輩と同じワッペンが燦然と輝く・・・という風景が毎年繰り返し返されています。子ども達のやさしさと根気強さがみえる嬉しい風景でもあります。



年長さんからワッペンを付けてもらった

その後は、毎月、8日前後を「赤十字の日」として、令和4年度は、異年齢グループを中心に活動をする日に設定しています。兄弟姉妹がいない子どもも、家庭では末っ子の年長児も保育園ならではの異年齢のつながりの中で成長した姿が見受けられます。1年の終わりに必ず取り組んでいるのが「一円募金」です。ひとりひとり牛乳パックや廃材を利用し

て募金箱を作ります。今回は、紛争地域の人々の暮らしが分かる写真を見せて「困っている人が世界にはたくさんおられる。みんなは遠くに住んでいる小さい子どもだけでもこの人たちを助けるお手伝いはできる。」「お母さんやお父さんに買ってもらいたいガムを1回我慢して、そのお金を募金箱に入れてね。」というお話をしました。「1回でいいの？2回でもいいよ。」と子ども達の声。できることがあると伝えることができたようでした。

20年表彰を受けて、青少年赤十字に加盟していることの意義を再確認しました。子ども達と一緒に赤十字の精神にのっとり広い視野で活動したり、考えたりできることは私たちの宝物ではないだろうか、と思います。

令和3・4年度青少年赤十字研究推進指定校（報告）

府中町立府中中学校



府中町立府中中学校は、広島市に隣接した府中町内にあり、現在1学年から3学年までの全学年6学級ずつと特別支援学級3学級の全21学級655名の生徒が在籍しています。昨年度・今年度と青少年赤十字社研究推進指定校として、青少年赤十字の理念である「気付き、考え、行動する」活動を授業や生徒会活動等で行ってきました。

本校で進めている「総合的な学習の時間」の柱は「探究椿」と「探究志」の2つあり、地域のことを考える「探究椿」で防災の学習をしています。テーマを「守られる防災から守る防災」と設定し、中学生になった今、地域のために何ができるのかという取組を進めていきました。

1 三・一メモリアルネットワーク 藤間さんのお話

東日本大震災を体験された講師の方から被災体験を聞きました。避難所での生活は、置かれた状況の中で最善の方法を探りながら、判断しなければならぬことを教えていただきました。生徒たちは、当初、実際に避難したら「支援物資で何とかなるであろう」と思っていたようですが、リクエスト通りに物資が届かなかつたり、物資が不足したりする中で、避難所にあるものを工夫して、生活していくことが必要であることに気付いていました。

2 青少年赤十字プログラムを取り入れた防災学習

「青少年赤十字防災教育プログラムくまもりのちひろめるぼうさい」の「みんなでわけよう」というプログラムを実施しました。役割や条件などが書いた「情報カード」、持っている食料が書かれた「食料カード」、誰と避難してきたのが書かれた「家族構成カード」をそれぞれに配り、班の中で役割分担をしながら「食料」の分配を考えるプログラムです。生徒たちは「条件カード」や「家族構成カード」に書かれたことを自分の身に置き換えて積極的に交流を行っていました。交流から「こうしたらよかつたんじゃない」などと改善策を考え、避難してくる人は様々な条件や立場が違うなどの気付きや、同じ量の食料を配ればよいという訳ではないということ

に気付いていました。

3 災害時に必要なことを考える体験型の授業

「防災グッズ製作」という単元では、チームごとに製作を行いました。製作を始めた当初は、「製作する」ことだけにとらわれていましたが、リーダー会を実施し、生徒が身近なものから物資を集め、製作活動を行うことで、考えを深めていく姿が見られるようになりました。段ボールベットを製作したチームは、実際に段ボールベットに横になつて寝心地を確かめ、周りに気泡緩衝材を巻いてみるなど、工夫し、改善を図っていきました。



段ボールベット作成中

また、「リアル避難所」という単元では、災害が起こった時、どのように避難所を運営すればよいか、疑似体験を行いました。計画は、「避難所運営者」「避難者」「観察・記録者」の3つに分かれ、「避難所運営者」は避難所に必要なものや対応方法、役割分担を考え、「避難者」は年齢や国籍、けがの有

無、所持品、その他のような条件や立場があるのかを想定していきました。「観察・記録者」は、記録を行う視点を考えていきました。



リアル避難所体験



日本赤十字社広島支部の方と府中町役場危機管理課の方に「リアル避難所」の運営場面を見ていただき、ご講評いただきました。実際に運営を体験してみたからこそわかることがたくさんあり、生徒のまなざしは真剣で考えを深めていきました。

今回、赤十字プロジェクトを元に授業を構成し、体験型の授業を仕組むことで、生徒は主体的に取組み、自分事として考えを深めることができました。青少年赤十字の理念である「気付き、考え、行動する」活動をこれからも地域と繋がりが行い、社会貢献できる生徒の育成を目指していきたいと考えています。

青少年赤十字への加盟に当たっての思い

広島県立広島工業高等学校教諭
近藤明弘



青少年赤十字活動には、「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」の3つの実践目標のもと、主体性を育むために「気づき」「考え」「実行する」という態度目標が掲げられています。

このことは、ボランティア活動を実践するためだけのものではなく、本校のように、「ものづくり」について学ぶ生徒たちにとっても重要なエキスとなるものだと考えます。困っている人や事（必要とされているモノ）に「気づき」、そのことは、どのようにすれば解決する（どの様なモノを作れば良い）のかを「考え」、実行（製作）して行くことこそ、「ものづくり」の基本的な態度と言えます。

本校では、専門的な知識・技術に磨きをかけつつ、社会に貢献する人材を育成することを教育目標としています。学んだ技術や知識が「誰のため」、「何のため」になるのかを理解（気づく）しなければ

ば、技術や知識に磨きをかけることはできないでしょう。また、「何をすれば良いのか」、「どうすれば良いのか」という課題について、論理的に思考する力を付けなければ、学んできたことを生かした「ものづくり」はできません。多面的、多角的な視点をもって他者と協働しながら、困難な課題の解決に向けて、粘り強く行動できる力を持つことこそが、社会の一員として自らの役割や責任を果たすことのできる技術者の育成につながるものだと考えます。

青少年赤十字の活動は、地域や世界の人びとの平和や福祉に貢献するような活動を学校の裁量で自由に行なうことができることから、「献血推進活動」や「防災活動」のように、青少年赤十字が主催する活動はもとより、専門高校で学ぶ生徒の特徴である「ものづくり」の知識と技術を活かした活動を行うことで、積極的に社会に貢献しようとする力と態度を育もうと思います。



例えば、本校は、平成12年から姉妹校提携をしている韓国国立釜山機械工業高等学校との交流事業を行っています。その際、記念品の交換をします。彫刻品や焼き物等を購入し贈答することが多かったことから、昨年度よりJRC活動に参加している生徒が、キーホルダーやフォトスタンド、木製名札等の制作に、自分たちの技術を生かしつつ携わっています。



これまでも、「困っている・苦しんでいる人の役に立ちたい」という優しい思いを持った生徒がいたと感じますが、その思いが思いのままに終わって

たのが現状です。ボランティア活動に、興味や関心はあるのに、何をどこから始めれば良いのかわからず、その優しさが埋もれてしまっていたのです。問題点に気づいても、活動（行動）に辿り着くまでに諦めることを選択してしまっていたのだと思います。「自らが気づく」ことは、「ひとりでする」ことではなく、「他者からの投げかけに」、自分は何が得るのかと言うことに気づくことでもあることを伝えながら、活動して行きたいところです。

特殊赤十字奉仕団のように、アマチュア無線、スキー、パトロール、視覚障がい者支援、語学、芸能など様々な専門技術や職業を活かした活動があるように、形にとらわれることなく、「ものづくり」など、自身の特徴やスキルを生かした活動を行う中で、自らもつ考えや意見を他者に分かるように工夫して表現できるようになり、幸せな社会の実現に貢献したいという情熱を持ち続ける人間へと成長してもらいたいです。

広島県青年奉仕団の活動について

く文房具回収ボランティアを通してく

植田健太郎



◎学生奉仕団からの変遷

現在、広島県青年赤十字奉仕団（以下「青奉」）は、前身を広島県学生赤十字奉仕団（以下「学奉」）に持ちます。学奉は昭和20年、終戦後の千田町にあった新生学園（現：広島新生学園）の訪問からスタートし、現在の青奉に続くまで75年

の歴史があります。その中で、献血推進活動や児童養護施設の訪問、障がい者との交流などを行ってまいりました。団員数も多い時は300名近くにもなり、構成大学も10校を超えることもありましたが、しかし、少子化やボランティア団体の普及により、団員数は減少の一途を辿りました。それに伴い、平成31年4月に広島県青年赤十字奉仕団に名称を変更し、現在に至ります。

私自身も平成17年に学奉に入団し、献血推進班の一員として活動を行ってまいりました。大学卒業後はHIROSHIMA 青年赤十字奉仕団（現在は青奉に統合している）に入団し、学奉団員のアドバイザーとして活動する傍ら、平成27年からは委員長を5年歴任しました。

◎令和4年度活動報告（主なもの）

○新入団員向けオリエンテーション

日時 4月26日・5月1日
参加者 約30名

内容 広島県青年赤十字奉仕団の前年度の活動を紹介したり、親睦を深めるためハイゼックスを使用し、蒸しパン作りを行いました。

○団内研修会

日時 11月12日
参加者 15名

内容 午前中は、日赤広島県支部指導講師の朝野氏の講演・グループワークを行い、午後は支部資料庫の見学・「NHK海外たすけあい」の概要理解・街頭募金の資料作成を行いました。

○合同交流会

6月18日には、広島県青年赤十字奉仕団、山陽

女子短期大学赤十字奉仕団、安田女子大学赤十字奉仕団の3団合同の交流会を行いました。50名近くの活動ということもあり、賑やかな雰囲気で行いました。



○100万羽折り鶴プロジェクトへの協力

9月22日からの広島グリーンアリーナ武道場での当日も3日間で延べ30名の団員が参加しました。

○「NHK海外たすけあい」支援キャンペーン（街頭募金）

日時 12月11日
場所 そごう前・パルコ前（中区）

参加者 ゆめタウン廿日市
合計25名

中区開催では、JRC高校生とも一緒に活動を行いました。

募金額 3か所合計 121、998円
(支援バザー)

日時 12月18日

場所 支部内駐車場等

参加者 合計25名

多数企業の協賛品のバザー、焼きそばの屋台出店を行いました。
収益 140、675円



○これからの時代にあわせた活動

令和2年からの新型コロナウィルスの感染拡大から、参加型の企画・イベントがなかなか開催できず、

イベント開催のノウハウや企画進行を行うリーダーシップを先輩から後輩に引き継ぐことが出来ませんでした。令和4年後半より徐々にイベントも実施できました。今後、一層団員の参加を促していきたいと思います。

また、学奉や青奉の強みである、大学の枠を超えた交流を続けていきたいと思えます。また、JRCの児童・生徒との交流、地域奉仕団との交流も行っていきたく思います。児童・生徒には「年齢の近いお兄さん・お姉さん」として、地域奉仕団には「若い力」として大学生の持つパワーを發揮していきたいと思えますので、これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

(随想)

JRCに出会い50年を越えました

(その二)

賛助奉仕団 副委員長 野田 崇



指導者トレセンや全国指導者トレセンで出会った個人的な参加者やスタッフの先生方からの学びは、クラス経営に反映させました。

「ひとはひと、自分は自分、されどなかよく」
御殿場の指導者トレセンで出会った言葉をHR担任として基本に据えて

15歳の春、様々な課題を背負って校門をくぐった

新入生との出会いは入学式前のHRで始まります。自己紹介とHRでの私と君たちの学校生活の課題として「ひとはひと、自分は自分、されどなかよく」を投げかけて、私のHR担任3年間は始まります。

多様な課題を持つ生徒たちとの日常は、学校生活の安定化が中心となることでした。「休むな・遅れるな・サボって帰るな」生徒たちへの語りかける言葉が学校生活の安定化に向かうと信じての日常でした。

生徒の言葉をとことん信じることは、「是は是、否は否」と語り合いながら人間関係づくりには、赤字やJRCに学んだ精神と行動を生かしてきました。3年間で、24名しか卒業させることができなかった時期もありましたが、中途退学した生徒たちの多くと今も連絡を取り合っています。彼らの結婚式に招待されたことも多くあります。退学した生徒が「仲間を」と申し込まれて一度は断ったものの、「だせん・だからお願いする」と断れませんでした。35年前のことです。

「赤十字」「青少年赤十字」と直接的に話しけることはほとんどありませんでしたが、精神と行動に裏打ちされた語りかけに努めてきました。卒業生にとって、「だせん」でよかったか？と自問していますが、「だせん」と訪ねてくれることに、よかったのかな？と思っています。(つづく)

令和4年度 青少年赤十字賛助奉仕団役員

- 委員長 山中章敬
- 副委員長 河戸靖子、野田 崇

幹事長 寺田宣文
 会計幹事 下野玲子
 監事 采谷宣子、吉丸朝美
 光本涼子、田中 博
 顧問 平越幸男、日高敬司
 曾山和彦、水野善親

編集後記

今年にはコロナ禍での3年目になります。青少年赤十字活動は大きく停滞しましたが、青少年赤十字100周年記念として支部を中心として100万羽プロジェクトは大成功に終わりました。また、トレセンも復活してきました。

その中であつて賛助奉仕団も2年開催できなかつた中国・四国ブロック大会が広島で開催できたことに大変喜んでいきます。

土砂災害が多発する広島県として、新教材を作成することとしました。皆様のご協力をお願いいたします。

編集委員

日高敬司、野田 崇、采谷宣子、下野玲子、山中章敬、寺田宣文

令和4年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会特別協議のまとめ(抄録)

I 赤十字の原点にかえる

- 1 理念の再認識の取り組み
- 2 100周年事業の取り組みがJRCを活性化

している。

- ① 100周年記念事業の「おりづるプロジェクト」を展開し加盟校が増えている。
- ② 事業として「優しさと思いやり」をピクトグラムにした。
- ③ シトラス運動「ただいま・おかえり」を言う人になろうと取り組んだ。
- ④ 100周年で5月に再度赤十字活動について学び直しをした。
- ⑤ いとすぎの植樹を進めている。

II 青少年赤十字活動を広める

- 1 加盟校を増やす取り組み
 - ① 外部への働きかけが功を奏する
 - ② 全国高校総合文化祭ボランティア部門が活性化に役立っている。
- 2 青少年赤十字活動の活性化に取り組む
 - ① 学校での活動は工夫が必要だ。
 - ② 学校へ語りかけることが重要だ。
- 3 JRCによって教師自身が変わってくる
 - ① トレセンに行く生徒が変わる。
 - ② JRCの陰で地域の防災活動に役立っている。

III 賛助奉仕団の活性化をはかろう

- 1 賛助奉仕団としての悩みなど
 - ① JRC加盟校の脱退を危惧する。
 - ② 少子化による統廃合による問題が大きくなってきた。
 - ③ 教職員の雇用形態の変化が問題になってきた。
 - ④ 先人の活動を学び伝えていくことが必要だ。
- 2 先輩教師としての役割がある

① 生徒指導提要が改訂され「指導」が「支援」に変わったことによる影響がある。

- ② 現在、道徳授業などで行っていることが全てJRCにつながる。
- 3 賛助奉仕団の活動を進化させる
 - ① 賛助奉仕団の活動は生き甲斐につながる。
 - ② 地域奉仕団との連携が活性化に役立つ。
- 4 教材づくりに取り組んでいる
- 5 各県とも広報誌を作っている。

① 賛助奉仕団員がトレセンへかかわることによって、JRCおよび奉仕団が活性化される。

② 賛助奉仕団が小学校・中学校・高校のトレセンスタッフとして参加している。

IV 防災・自然災害に対する取り組み

- 1 「まもるいのち ひろめるぼうさい」が活かされていない。
- 2 各県独自の取り組みが進んでいる。

V 新型コロナウイルス問題への対応や取り組みについて

- 1 コロナ禍でJRC字動および賛助奉仕団の活動が停滞した。
- 2 コロナ禍においても工夫してトレセンを実施した県がある。
- 3 本社配布の「新型コロナウイルス感染症の3つの顔を知ろう」は使い方次第だ。

(このまとめは、4グループに分かれて同じテーマで話し合ったことをRJ法的にまとめたもので9頁になります。この抄録では直接の発言は割愛しています。本編が必要な方はPDFにて提供可能です。詳しくは、広島県支部組織振興課にお問い合わせください)

令和4年度 青少年赤十字賛助奉仕団事業報告

実施日	場 所	活 動 内 容
4月22日(金)	日赤広島県支部	賛助奉仕団役員会、機関紙「賛助ひろしま」発送作業 青少年赤十字指導者協議会総会・研修会参加
5月21日(土)	日赤広島県支部	会計監査 賛助奉仕団総会
6月11日(土)	日赤広島県支部	「中四国大会」準備、防災教材づくり計画
7月2日(日)	日赤広島県支部	指導者研修会
7月9日(土)	日赤広島県支部	「中四国大会」準備、防災教材づくり
7月14・15日(木金)	日赤本社(東京)	全国賛助奉仕団協議会総会(山中委員長)
8月8・9日(月火)	県情報プラザ・県支部	高校トレーニングセンター(スタッフ参加)
8月17・18日(水木)	日赤広島県支部	中学校トレーニングセンター(スタッフ参加)
8月20日(土)	日赤広島県支部	「中四国大会」準備、防災教材づくり
9月24日(土)	県立総合体育館	100万羽おりづるプロジェクト ギネス登録作業に参加
10月1日(土)	日赤広島県支部	「中四国大会」準備、防災教材づくり
10月17日(月)	日赤広島県支部	指導者協議会役員会・常任委員会
10月18日(火)	日赤広島県支部	「中四国大会」準備
10月27日(木)	日赤広島県支部	「中四国大会」前日準備
10月28日(金)	日赤広島県支部	中四国ブロック賛助奉仕団連絡協議会・研修会(広島大会)
10月29日(土)	メルパルク 平和公園周辺 国泰寺中学校	夕食・交流会 平和学習(原爆関連モニュメント等の見学) 青少年赤十字広島県大会(参加)
11月26日(日)	日赤広島県支部	小学校トレーニングセンター
12月7日(水)	日赤広島県支部	「賛助ひろしま」第1回編集会議
12月20日(火)	日赤広島県支部	「賛助ひろしま」第2回編集会議
1月31日(火)	日赤広島県支部	賛助奉仕団研修会(防災図上訓練)
2月10日(木)	日赤広島県支部	広島県青少年赤十字研究会参加
3月16日(木)	日赤広島県支部	「賛助ひろしま」第3回編集会議